第63回

新潟県小中学校 PTA研究大会

小千谷大会要項

期日

令和6年10月6日(日)

12：40～16：50

会場

小千谷市民会館

主催：新潟県小中学校PTA連合会
共催：小千谷市教育委員会
後援：新潟県教育委員会　(一社)新潟県PTA安全互助会
主管：小千谷市PTA連合会

ご挨拶

新潟県小中学校PTA研究大会は、子どもたちの成長への諸課題に対する課題解決に向けたPTA活動を研究、共有する学びの機会として半世紀以上に渡り実施してまいりました。今年度の小千谷大会が63回目の大会となりますが、今までを築いてくださいました会員皆様に敬意と感謝を申し上げます。

さて、小千谷市は、新潟県の人口が全国１位だった江戸時代に、織物である小千谷縮を主とした商業により関東、関西をつなぐ大切な役割を担う越後の拠点の一つでした。戊辰戦争においては西軍、東軍の談判の機会をつくった歴史もあり、歴史の大きな転換期の場として全国や世界で活躍した政界や経済界の方々が訪れる地域です。そして、学校教育においては、地域内だけではなく、戊辰戦争で疎開する周辺地域の子どもたちも含め、教育に力を注ぎ、日本最古の公立小学校を設立した歴史もあります。地域の有力者を中心に住民、保護者、教育者が一体となり教育に尽力するという精神が根付く地域です。

人口動態、社会情勢の変化により、生活環境や教育環境が変わり続ける中で、PTAの組織、活動も時代にあった在り方や、やり方が求められます。本大会が、ご参加くださる保護者、教育関係者の皆様にとって有意義な機会となりますようこの研究大会を開催いたします。

新潟県小中学校PTA連合会　会　長　宮下 あさみ
小千谷大会実行委員会　委員長　山 田　一 郎

大会主題

考えよう　持続可能な意義あるPTA活動
～未来の会員のために～

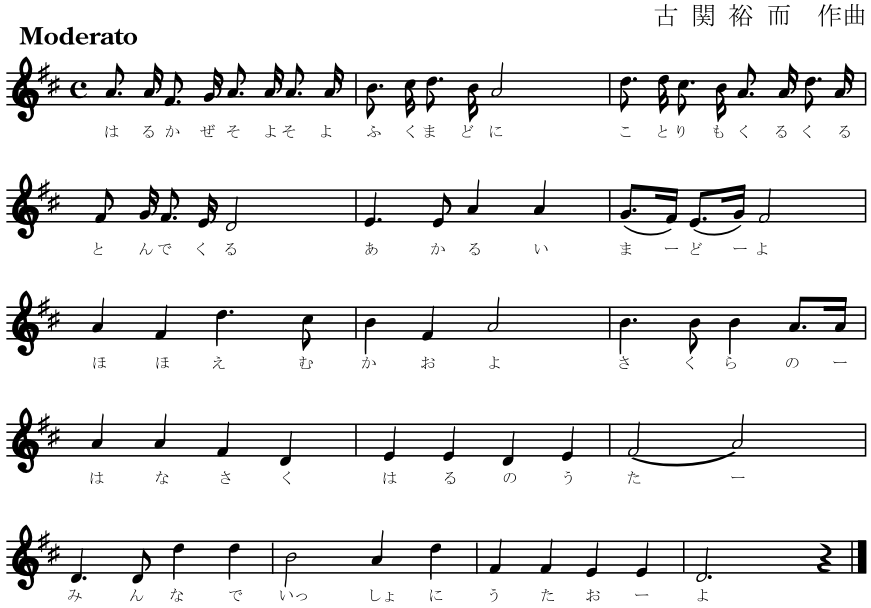
大会趣旨

子どもたちのより良い成長は、保護者、教職員共通の願いです。しかし、様々な事情から双方が協働する組織を解散する現実が全国各地にあります。共通の願いを持つ者同士だからこそ、それぞれの立場を活かし価値ある協働組織として後世に受け継ぐ必要があります。

よって、PTAの在り方を再確認、再発見し、未来に向けた改革へのヒントを共有できる研究大会を実施します。

ＰＴＡの歌

春日紅路　作詞
西条八十　補詞
古関裕而　作曲



1、春風そよそよ　吹く窓に
小鳥もくるくる　とんで来る
明るい窓よ　ほほえむ顔よ
さくらの花咲く　春の唄
みんなでいっしょに　うたおうよ

2、みどりに輝く　学校が
明るい家庭を　よんでいる
希望の町よ　希望の村よ
文化の光に　手をのべて
子どもといっしょに　進もうよ

3、あふれる力に　健康に
子どもがよんでる　おどってる
みのりの秋よ　もみじの丘よ
こころも楽しい　ハイキング
子どもといっしょに　おどろうよ

4、世界を結んだ　大空に
ひびいて子どもの　胸が鳴る
あしたの鐘よ　夕べの鐘よ
平和で住みよい　日本を
みんなでいっしょに　つくろうよ

日　程

12：00	12：40	13：25	13：50	14：45	16：30	16：50
受　付	開会式 表彰式	新潟県 教育委員会 のお話	記念講演	パネル ディスカッション	閉会式	

開会式・表彰式　12：40～13：25

1．開式の言葉	小千谷大会実行副委員長	森　本　恵理子
2．国歌斉唱		
3．ＰＴＡの歌斉唱		
4．開会のあいさつ	新潟県小中学校PTA連合会会長	宮　下　あさみ
5．来賓祝辞	新潟県教育委員会 教育長	佐　野　哲　郎　様
	小千谷市長	宮　崎　悦　男　様
6．来賓紹介・祝電紹介	新潟県小中学校PTA連合会副会長	長下部　眞　太
7．新潟県小中学校PTA連合会表彰		
8．閉式の言葉	新潟県小中学校PTA連合会副会長	藤　巻　優　樹

新潟県教育委員会からのお話　13：25～13：50

記念講演　13：50～14：45

ここから始まれっ！ PTA新時代！！
これからの公教育が求める学校と保護者の役割

講師 ： 福本　靖 氏 ・ 今関明子 氏

パネルディスカッション　14：45～16：30

PTA改革の実践者に訊く　教えて！お悩み解決策！！

岩崎　智 氏 ・ 武藤愛美 氏 ・ 山田祐輔 氏 ・ 福本　靖 氏 ・ 今関明子 氏

閉会式　16：30～16：50

1．開式の言葉	小千谷大会実行副委員長	木　村　雄　介
2．閉会のあいさつ	小千谷大会実行委員長	山　田　一　郎
3．次期開催地の紹介	妙高市小中学校PTA連合会	
4．閉式の言葉	新潟県小中学校PTA連合会副会長	今　井　康　弘

ここから始まれっ！これからの公教育が求める

福本　靖

プロフィール

改革当時、神戸市立本多聞中学校で教頭を1年3か月、その後2年間校長を務める。次に、神戸市立桃山台中学校で5年校長を務め、定年退職。川西市教育委員会理事を経て、今年度2024年4月から神戸市教育長に就任。

中学校では「保護者の意向を汲まずして学校運営はできない」との理念を持った福本校長のもと、毎月１回の学校とPTAの意見交換会は、不可解な学校なりの拘りを解き明かす場になり進路など保護者の知りたいことを深く聞く場になりました。学校とのパイプ役となるPTAの意義が

福本靖氏紹介

平成20年度に新任教頭として赴任した中学校は問題行動が多発し、学校として機能不全の状態でした。その荒廃は、さまざまな要因が何年も前から徐々に積み上げられてきた結果でしたので、簡単に改革できるものではありませんでした。学校も教育委員会も対応はしてきたようですが、改善は見られませんでした。私が赴任後も有効な手立てがないまま、日々特定の子どもたちに振り回され、教員も疲労困憊（こんぱい）の状況でした。この手詰まりをどうしたら乗り越えられるのかと考えていたときにふと、「もし自分の子どもがこの学校に通っていたらどうするだろうか」と思うようになりました、改革を学校の視点や都合だけで進めようとするから無理があるのであって、最大の当事者である子どもたちや保護者に意見を求めることに意味があると考えました。保護者から悲惨な状態に対する批判が殺到することが予想されましたが、学校の付け焼き刃的な対応には限界であり、ここで大きな壁を崩さなければ悪循環から抜け出せないことも明白でした。保護者どうしの対立や偏見、プライバシーの問題などの懸念はありましたが、結果的に保護者の意見や発想を取り入れることで、きわめて実現的で有効な対応が可能となりました。この成功体験から、改めて保護者の学校における存在の大きさを痛感し、一方、機能しなくなりつつあったPTA活動への危機感も高めました。

その後、教育委員会勤務を経て、平成25年度に校長となった中学校で、PTA改革に取り組みました。「PTAにはもっともっと大きな役割があるのに」。偶然同じような考えを持っていた当時のPTA本部役員の今関さんと両輪で、大胆にPTAを変えていくことになりました。その様子が徐々に口コミで広がり、マスコミにも取り上げられるなどして大きな話題となりました。少しでも多くの保護者に役立ててもらうために、改革の顛末（てんまつ）を今関さんとの共著で『PTAのトリセツ～保護者と校長の奮闘記～』として出版しました。その後、PTAは任意加入であるとの認識が全国的に広がり、これまでの組織や活動を大幅に見直したり、PTAそのものを廃止したり、シンプルな保護者会として出直したり、また、形骸化の象徴ともされた上部組織から脱退するケースも急増しました。

このようにPTAという組織が揺れ動く中で、今後、保護者はどのように学校と対峙（たいじ）していけばいいのか、次のステップを模索する段階に差し掛かったのですが、ちょうどこの時期にコロナ禍となりました。さらに働き方改革として教員の業務改善が急務となり、学校はこれまでの常識が通用しない大きな転換期を迎えました。『PTAのトリセツ』はPTA改革の指南書としてだけでなく、学校運営に保護者の参画が必要なことを指摘しています。まさか原稿を書いているときは、すぐにコロナ禍が来ることも働き方改革がここまで大きな課題となることも予想していませんでしたが、いずれ学校現場が混迷の時代を迎えることと、その時には保護者が積極的に関与する以外に解決の方法がないと確信していました。

不登校、学力格差、いじめ、個別対応、部活動、働き方改革、コロナ対応……保護者の不安や疑問は増すばかりですが、本書は保護者に学校を知る足がかりになることを目指し、これまでの保護者とのさまざまなやり取りも取り入れながら執筆しました。課題山積みの令和の学校を変えるには、保護者の力が不可欠です。保護者の方々が学校と向き合ううえで参考にしていただければ幸いです。

講演

PTA新時代！！ 学校と保護者の役割

理解され役員率が高まりました。

子育て中の一定期間、学校教育に関わることは親だからこその想いを活かせる大切なチャンスです。既存のPTAがそのために何ができるか、学校、保護者の役割を皆さんと一緒に考えたいと思います。

今関明子

プロフィール

神戸市立本多聞中学校のPTA副会長を2年、その後1年はPTA会長を務め、退任後は保護者と校区住民を結ぶ活動に取り組む。「学ぶこと、わかることは、衣食住を整えることと同じくらい大切な経験」と、現在は放課後学習会を運営。

今関明子氏紹介

コロナ禍以降、保護者が学校に足を運ぶ機会が減りました。また、先生の多忙化や休職率の高さがYahoo!ニュースをにぎわす昨今、「ちょっと先生に聞いてみる」ということが、気軽にできなくなりました。

子どもを学校に通わせていると「これってどうなっているの?」と思うことがいろいろとあります。今まではわざわざ学校に電話して聞かなくても、学校行事などで出会った先輩ママから教えてもらっていました。小学校のスポーツ大会や中学校の部活の試合で、先生や他の保護者と一緒に応援しながらするたわいない雑談のなかで、学校のことを知ることができました。

ところが教員の働き方改革の流れで、知らず知らずのうちにそのような機会は減っています。学校側も忙しい保護者への配慮から、保護者の学校に関わる機会を減らしています。

保護者の学校との関係がシンプルで楽になると同時に、得られる情報も減り、成績や評価、クラス分けなどについての噂や謎ルールに対し、真偽を判断できる材料がなく右往左往し、後に先生から「そんなことがあるはずがない。もっと早く確認してくれたらよかったのに～」と笑い話で終わることもよくあります。

かつてPTAは、新入生の保護者を、分け隔てなく自然な形で受け入れていましたが、最近「加入は任意」であることが周知され、「どっちでもいいなら、あえて入らなくてもいいかなぁ、役員は避けたいしなぁ」と「何となく無難に非加入」を選ぶ人が増えました。

たしかにPTAには役員の強制や活動の形骸化など、嫌がられてもしかたないことも多々ありました。

一方で、役員になれば良くも悪くも学校に足を運ぶ回数は増え、学校を知ることができます。お互いくじに当たった不運から仲間意識がめばえ、子どもの学年や性別、趣味も違う接点のなかった保護者と意気投合し、卒業後も続く親しい友達ができるメリットもありました。

PTA仲間での雑談の特徴は、部活や習い事など嗜好や環境の似た保護者同士のライングループの会話と違い「世の中には（といっても、校区内規模ですが）いろいろな考えの人がいるなぁ」「我が家の『フツーはこうだろう』は、我が家だけの常識なのだなあ」と痛感することが多々あることです。

一つ例を挙げましょう。

学校には「登校時間は8時以降」という決まりがあります。「教員の勤務時間は8時15分からなのに、なんで8時に子どもたちが校内にいるのか」という矛盾はさておき、「勤務の都合で朝一人になる我が子を8時より早めに登校させたい」とAさんは考えます。就学前は保育園で8時前の登園ができたので、学校も当然そうあるべきだと要望します。それを聞いた保護者たちの反応はさまざまです。「そうだよね。仕事なんだからフツーは、配慮してくれるよ」「フツーは、子どもの安全を守るのが学校だもんね。留守番は危ないよ」「えっ、フツーは勤務遅らせるでしょ」「それないわ。フツーは保育園じゃないし、頼まないよ」。

他の人の考えに目から鱗で「うーん」と唸ることも多く「校区内の同世代でもいろいろな考えの人がいる」「自分の考えがすべてではない」という認識を得ます。

この認識がないと8時前登校を断られた瞬間に「学校が悪い!私は正しい」という考えに陥り、不幸な場合は学校に対する不信感がそのまま続きます。

このようにPTAには出会わないはずの保護者をつなぎ、運営委員会など重ねるうちに、他の家庭の常識がチラ見できるという隠れた功績がありました。

少し時間をやりくりすれば、適度にPTAに関わることができた人たちが、「なんとなく非加入」を選び、複合的な視点を養う機会を失うことは、とてももったいなく残念です。

そしてPTAで意見を出し、学校と一緒になって大勢で考える機会を持たなくなった保護者は、我が家の要望（一部は行き過ぎた理不尽な要求など表現されたりもしますが）を、保護者間のフィルターにかけることなく個々に学校にお願いすることになります。

少し話は飛びますが、子どもたちが今、流行りの制服見直しを要望する場合、①完全制服撤廃派、②大きく声はあげないけれど、経済的な理由からお下がりがもらえる制服がいい派、③私服を考えるのが面倒だから標準服を残したい派、が存在します。300人の生徒がバラバラに希望を伝えたら、学校はまとめようがありません。

現実的に進めるには生徒会、検討委員会が、個々の要望を集め、生徒たちで互いの思いを受け止めながら方向性をまとめ、学校に伝えるという手順が踏まれます。

保護者も同じです。全ての保護者が悪意なく「フツーはこうだよね」を、直接個々に学校に学校に要望すると学校は真摯に受け止めればこそ、360度全方位の保護者に気を遣うあまり無難な回答を用意せざるを得ず、結果的には前例踏襲、または他校と横並びの方針で説明責任を果たすことになるでしょう。

学区改変など大きな問題なら保護者の声を伝える仕組みが作られますが、日常の問題なら、生徒会の役割を果たしていたPTAや保護者会かその機能を失えば、学校は向き合う先がありません。

それは、最近よく言われる「学校はどんどん内向きになっている」「学校は何でも横並び」につながります。

「なぜ学校はあんなに閉鎖的なんだろう」と嘆かれる場面は多々ありますが、皮肉にもその一因は、「学校にはいろいろな意見が寄せられている」ことに気がつく機会を失ったまま、「我が家のフツー」で学校と対峙する私たち保護者のせいなのかもしれません。現状を把握したり知識を持つことは、自分を落ち着かせたり前向きな発想を持つことに繋がります。

「ちょっと先生に聞いてみる」機会を今後どのように維持するのかは課題です。

学校と一緒になって子どもの成長を支える保護者の方々に、また、学校が地域に門戸を広げたときの受け皿になる地域の方々に、今の学校の仕組みやお隣さんの考えを知る機会をつくり「学校に関わること、応援することって楽しい」に繋がればと思います。

２０２４年４月初版　令和版　学校のトリセツ　保護者と先生のための学校入門　より

アンケート結果

PTA改革の実践者に訊く

岩﨑　智
（子ども1人）
新潟県糸魚川市立
糸魚川東中学校
（当時の全校生徒136名）
令和3年度会長

「初めてのPTAが会長職。人口減少に悩む田舎の小規模校の現実。持続可能な組織へ改革実行。」

『持続可能なＰＴＡを目指して』

新潟県糸魚川市にある糸魚川東中学校は、市内４つある中学校の中でも生徒数が130名前後の規模の小さな学校です。地方都市における小規模な中学校で実施した PTA 改革を紹介いたします。

コロナ禍真っただ中の令和３年度に私は当校のPTA会長に就任いたしました。会長の立場になり、本校のPTAにいくつも課題がある事に気づかされました。私が気になったのは「なり手不足」「主体性」そして「組織としての持続性」の三点です。

［課題① なり手不足］

まず『会長や副会長の要職に就きたがらない保護者が多い』と感じました。昔も今も、会長や副会長（三役）の選出時において多くの保護者が大きなストレスを抱えているようです。会長職に自ら望んで手を挙げるケースはまれであり、大半の保護者は要職には就きたくないと考えるのが一般的かと思います。それは重責を担う事による精神的な負担を考えてのことかと思われます。また、拘束時間が増えるのではないか、と考える方もいるのではないでしょうか。そのため、三役選出の会議（当校では２学年の保護者から三役を選出する方式）は重苦しい空気が流れていたのが印象的でした。一方で、クラス役員や専門部役員を選出する会議では、活発に手が挙がる光景をよく目にします。PTAに対して積極的に関わろうとする姿勢で頼もしく感じます。しかし、役員選出規定に『役員経験者は三役選出から免れる』と記されております。そのため、保護者の中には要職を避けるために1学年のうちに役員へ立候補するケースがある、という話を聞いたことがあります。「なり手不足」と呼ばれる言葉の裏側には一言では言い表せない複雑な事情や思惑があるのではないでしょうか。三役選出会議では役員経験者の人数割合が多く、限られた会員の中から要職者を選出しなければならない実情があります。

［課題② 主体性］

次は「主体性」に関しての課題です。当校PTAの事業やその立案過程を見ていると前年踏襲型の事業が多いと感じました。実施している事業は前年と同じ内容で、資料はコピー＆ペーストが多く、主体性に欠けている状態でした。子どもたちにPTAとしてどう関わるべきかを考え、今の時代に見合った事業が展開できるPTAにならなければなりません。

［課題③ 組織としての持続性］

現在のPTAを取り巻く環境はコロナ禍や教員の働き方改革など、今まで通りのやり方では通用しない状況になってきました。社会全体もデジタル化が進み、GIGAスクールの到来により子どもたちを取り巻く環境も目まぐるしく変化しております。それに加え地方都市では、小規模校において組織として変わらざるを得ない大きな社会現象が起こっております。それは「人口減少」問題です。

当校は1995年に市内の３つの小規模校（糸魚川第二中、上早川中、下早川中）が統廃合して開校した中学校です。当時の生徒数は352名が在籍している中規模校でした。しかし、2021年には生徒数は136名となり、約30年前から比較すると生徒数が３分の１程度の規模に減少しております。都市部や大規模校と違い、小規模校ではPTAの入会率は高く、大半の保護者が入会しております。しかし、生徒数自体が減少しており、PTA会員数も年々減少している状態です。

会員数が減少しているのに、当時のまま（会則を変更せず）運営しており、そこに無理が生じているのではないかと考えました。会員数に対して役員の割合が多く、要職者を選出する際の妨げになっています。役員の選出方法を精査する以前に、そもそもPTAの事業や組織自体を見直す時に来ているのです。中心となる子どもたちにとってよい影響のある、気持ちのこもったPTAを展開しなければなりません。未来の子どもたちのために、今の時代に合った持続可能なPTAを目指そうと考えました。

［主な具体策］

具体的には以下の点の改革に踏み切りました。

①活動内容の見直し（目的達成事業の廃止）　②専門部の統廃合（4部から1部へ）　③組織のスリム化（役員数を減員）
④会則の変更（組織図の変更）　⑤デジタル化（会議、資料配信、出欠管理）

［具体策① 活動内容の見直し（目的達成事業の廃止）］

「給食の試食（教養部）」年に一回、役員が給食を試食し、報告書にまとめます。当市の給食事情は、私たちが学生だった時代から比較すると飛躍的に改善されております。子どもたちの給食への反応も良く、味も献立も栄養バランスも良好な状態です。過去と比較してみても、今すぐに何かを変えなければならない状態ではないと考えました。

次に、「あいさつ運動（育成部）」です。平日の朝の登校時に役員が生徒玄関前であいさつをする活動です。まず、保護者にとって朝の時間帯は忙しい時であり、負担がかかります。また、もともと当校の子どもたちは日頃からあいさつが出来ています。服装や髪形など風紀の乱れに関しても特段問題のない状況です。子どもたちは指定の服装を着用しており、私たちの学生時代とは違い、反抗心を目で見える形に現す時代ではなくなりました。

これら二つの事業は、過去のPTA活動のおかげもあり、ある一定の目的に達成していると考えました。また、時代にそぐわない事業でもあると捉え、廃止しました。

一方で、廃止しなかった事業は「グラウンド美化活動（厚生部）」です。これは体育祭の一週間前にグラウンドで草むしりと石ころの除去をする事業です。一見、不人気な事業として捉えられがちです。しかし、この事業には注目するべき点が二つあります。役員だけが実施する事業ではなく、保護者、教員、生徒が一堂に会して実施している点に加え、参加率が九割近い事業なのです。PTA会則の目的には「会員相互の親睦を深める」と定めてあります。その目的から逸脱しておらず、参加率も高いため、この事業は継承することにしました。

［具体策② 専門部の統廃合（4部から1部へ）］
［具体策③ 組織のスリム化（役員数を減員）］
［具体策④ 会則の変更（組織図の変更）］

事業を見直し、二つの事業を廃止しました。四部に分かれていた専門部を一つに統合しました。そして、専門部の数を減らした事により、役員の人数も減員し、組織全体をスリムにしました。

［具体策⑤ デジタル化（会議、資料配信、出欠管理）］

本改革を実施した令和３年度はコロナ禍であり、GIGAスクールが到来したときです。市内の小中学生にタブレット端末が配布されたタイミングでした。コロナ禍での会議の実施方法にも悩まされる日々でした。しかし、全国各地の先進学校の事例を基に、PTAもアナログからデジタルに移行しようと考えました。ペーパレス会議（支給品のタブレット端末を活用）、資料の事前配信、出欠管理などさまざまな力所にデジタルを導入しました。作業負担の軽減や資源・経費の削減につながりました。また、保護者がデジタル端末に触れる機会を設けることができたのも利点の一つとも言えるでしょう。

［今後への期待］

私たちが学生時代だったころとの違いの一つに、社会がアナログからデジタルへと変わってきた点があります。便利なツールではありますが、問題点も多いのが実情です。現在の子どもたちのコミュニケーションにおけるトラブルにおいて、デジタルが介在しているケースが増加しています。子どもたちにとって今、最も重要な課題の一つである「情報モラル」への関心が高まっております。現在、当校PTAでは親も子もこの課題に力を入れ始めました。前年踏襲型の古い事業を廃止したことにより人員も費用も余裕が出てきたため、今の時代に見合った事業ができるPTAへと変わり始めました。地方都市の小さな学校のPTA。子どもたちの未来を考え、持続可能な組織を目指し、より活発な活動が展開できるPTAであることを願います。

からお題の設定

教えて！お悩み解決策！！

武藤愛美
（子ども5人）
群馬県伊勢崎市立名和小学校
（現在の全校児童450名程度）
令和1年度副会長
令和2年度会長
令和3.4年度会計
令和5.6年度会長

「5人の子どもを育てながら、こんなPTAやってられない！ 改革実行、ボランティア制度にギアチェンジ真っ只中。」

1、役員になったきっかけ

元々幼稚園で何度か会長をやっていたことから、当時の小学校の本部役員さんに声をかけていただきました。当時は仕事もしていなく、専業主婦だったこと、私自身が埼玉県出身で、結婚を機に主人の地元である群馬県の伊勢崎市に引っ越してきたため、あまり知り合いもいなく、学校の状況などが全然わからなかったので本部役員になるのはいい機会かもと思いやらせていただくことにしました。あとは多分私が役員とかやるのが好きなんだと思います（笑）

2、当時のPTAに感じたこと

とにかく仕事量が多かったです。あと会議の回数。LINEなどでも済む内容も会議を開いていたので、毎月会議がありました。月に3回、4回とやる月もありました。

3、感じたことから起こした具体的改革(解決)内容。

会議の内容の検討。回数を減らす。仕事内容の検討。量を減らす。本部役員だけでなく、他の委員も仕事内容などを検討し、減らしました。必要ないと思った委員も無くしました。ただ、それにより子どもたちの学校生活に支障がでてはいけないので、子どもたちが楽しみにしている行事、子どもたちに必要なことは残して、役員が全てやるのではなくボランティア制にして全保護者で協力できるようにしました。

4、変化による現状や、これからにむけて思うこと

この体制にしてまだ1,2年ほどなのでまだまだ改善していかなければならないことはたくさんありますが、「役員活動が楽になった。」「負担が少なくてやりやすかった。」という言葉はいろいろな保護者からいただいてます。ただ、やはりまだPTA＝負担、大変と思っている方がほとんどかと思います。負担の感じ方って人それぞれなので、全員の方に負担が軽減したことを感じていただくのは難しいと思っています。ただ、子どもたちが安心して充実した学校生活を送るためには、やはり私はPTAは必要だと思っています。ただ無くせばいいではなく、残しながら、でも負担なくやるにはどうしたらいいか。今後も悩み考えていけたらと思っています。子どもたちのために、我が子のためだけでもいいので、子どもたちの笑顔のために少しでもやってみようかな？と思っていただける方が増えると嬉しいなと思っています。

山田祐輔
（子ども4人）
新潟県柏崎市立新道小学校
（150名程度）
令和4、5年度 副会長

「熱血会長を支える副会長楽しさに絞った 活動改革で翌年役員立候補溢れました。」

せっかくだったら面白いＰＴＡを
地方都市の生き残り方を想像する。確実なことは、変化の多い現代社会において「現状維持」は「激しい衰退」を意味するという事実。だが課題の多さはチャンスの多さと見ることができる。社会を現状より良い状態にして次の世代へバトンを渡すという、ビジョンと覚悟があればできる。子どもたちに勉強を強要する前に、親たちが勉強しよう。誰かのせいではなく、まず自分から変えていこう。努力し続ける者の未来は常に明るい。

○背景

・全学年1クラス、全校生徒150名程度の規模
・今後10年間の児童減少推移が、たしか新潟県でワースト1位
　今後めっちゃ児童数減ることが分かっている。
・古い田舎の地域なので、親御さんも新道小学校出身というケースがけっこう多い。
・PTAの役員仲間にも、妻の同級生夫婦や先輩後輩が普通にいたりする。

○やったこと

・今年度PTAのテーマをしっかりと掲げた
・お神輿を作った
・体操着（致命的に穴が開いてたりするもの以外）や筆記用具（新品のみ）の譲渡会を実施した

○流れ

①予定者顔合わせの時点で、熱すぎるPTA会長（30代男性。本業は保育士さん）が「やりたいことリスト」を資料にまとめて持ってきた。この時点でお神輿を作りたいというアイデアはあった。
②山田が、「気持ちはわかるけど、whatとかhowの前に、whyが大事だよ」という話を、サイモン・シネックの著書『WHYから始めよ！』のゴールデンサークル理論の概略をホワイトボードに描きながら説明（この時点で、大半の役員さんドン引き(笑)。みんな仲良くなった今となっては笑い話）。具体的な事象の前に、全体的なグランドマップや目的を深堀して、しっかりと全体テーマを掲げることが大事だよ、という話。
③めーっちゃまじめなPTA会長が、次の会議の時にテーマとして掲げたいキーワード「つながり」を提案。満場一致で合意。そのテーマを実践するための施策として、お神輿っていいよね、と改めて合意。
④裏テーマとして、一年間このメンバーでワイワイやって楽しそうな雰囲気作って、一年後に、自発的に三役に立候補してくれる人が一人でもいたら成功だね、と盛り上がる。
⑤制作したお神輿は、校区内にいくつか分かれている集落の子ども会イベントなどにも貸し出すことが前提。お神輿がいろんなつながりの懸け橋になるイメージ。
　※いろんな繋がり…
　　先生×生徒　親×子　先生×親　学校×地域　子ども×親以外の地域住民
⑥3人いる副会長の中で現役の大工さんがいたので、大工さんを中心に、土台はPTAで制作。
⑦飾り付けは子どもたちや親御さんたちに作ってもらった。運動会やマラソン大会、授業参観の時に花飾りをみんなで作って、お神輿に張り付けてもらった。
⑧常に意識していたのは、ついでに、軽く、参加できるということ。わざわざお神輿制作の日を定めたりするよりは、「運動会のついでに、花飾りを一つその場で作ってその場でお神輿に飾る」くらいの手軽さを意識。負担軽減。ご家庭によって、学校行事にかけられる時間のリソースはギャップがあるため、なるべく手軽に誰でも関われるように。
⑨PTA会長の所属する集落の子ども会イベントで、ためしに担いでみた。地域のおじいちゃんおばあちゃんたちも大喜び。
⑩1月の学校行事の中で、全校生徒に順番に担いでもらったり、触れてもらったりした。
⑪世代間のつながりということで、家に眠っている体操着や筆記用具を循環させるアイデアがでた。授業参観の前に案内を出して、授業参観当日に持参いただくことで、負担を減らせた。思いのほか多くの体操着や筆記用具が集まった。
⑫一年間楽しかったので、PTA三役8人で、3月中に宴会予定。
⑬楽しげにワイワイやっていたら、本当に自発的にPTA三役に立候補してくれたお父さんがいた。大成功！！

令和6年度 新潟県小中学校PTA連合会表彰 受賞者

①団体表彰

上　　越	上越市立諏訪小学校ＰＴＡ
上　　越	上越市立里公小学校ＰＴＡ
上　　越	上越市立上杉小学校ＰＴＡ
上　　越	上越市立美守小学校ＰＴＡ
上　　越	上越市立戸野目小学校ＰＴＡ
長岡出雲崎	長岡市立下塩小学校ＰＴＡ
長岡出雲崎	長岡市立大積小学校ＰＴＡ
長岡出雲崎	長岡市立神田小学校ＰＴＡ
柏　　崎	柏崎市立新道小学校ＰＴＡ
見　　附	見附市立見附特別支援学校ＰＴＡ
小　千　谷	小千谷市立吉谷小学校ＰＴＡ
新　発　田	新発田市立藤塚小学校ＰＴＡ
新　発　田	新発田市立紫雲寺小学校ＰＴＡ
新　発　田	新発田市立米子小学校ＰＴＡ
佐　　渡	佐渡市立赤泊中学校ＰＴＡ

（以上　15団体）

②個人表彰

上　　越	畠山　徹	加　茂	酒井　洋美	燕・弥彦	山田　泰士
上　　越	滋野　康賢	見　附	五十嵐拓也	村上岩船	時田　喜雄
糸　魚　川	小林　博幸	小千谷	片岡　太郎	阿　賀　野	中原　順一
妙　　高	石井　雅江	南魚沼	志田　聡一	佐　　渡	金子　典央
長岡出雲崎	藤井　盛光	魚　沼	松尾　亮輔	胎　　内	八幡慎太郎
長岡出雲崎	小林　太一	南蒲原	小柳佳奈子	聖　　籠	宮下ひとみ
長岡出雲崎	星野　貴洋	新発田	井澤　翔太	阿　　賀	飛田野一成
三　　条	塚田　泰志	五　泉	佐久間哲平		
加　　茂	石附　大昌	五　泉	畑　泰弘		

（以上　25名）

③個人感謝状

上越	植竹 智美	見附	栗林 誠	燕・弥彦	松原 徹
上越	熊田佳奈子	見附	大田 克	燕・弥彦	海津 正芳
上越	丸田 静華	小千谷	森本恵理子	燕・弥彦	渡邉 光
上越	柴峰美津衣	小千谷	樋口 満	燕・弥彦	安田 洋
上越	竹内 梓	小千谷	阿部 博明	燕・弥彦	諸橋 清
上越	山口 信一	十日町津南	田村 俊郎	燕・弥彦	髙原 慎詞
上越	滝沢 祐介	十日町津南	石橋麻衣子	燕・弥彦	山﨑 正義
上越	佐藤 和仁	南魚沼	笛田 利広	村上岩船	本保 和平
上越	内田 健二	南魚沼	阿部 政之	村上岩船	小田 篤
糸魚川	根津 恭子	南魚沼	田中 俊行	阿賀野	山嵜 啓之
長岡出雲崎	市村 亮介	南魚沼	北川 義行	阿賀野	金子 正浩
長岡出雲崎	青柳 潤	魚沼	佐藤 裕一	阿賀野	根津 佑弥
長岡出雲崎	小黒 正人	魚沼	岡部 義彦	阿賀野	大石 康範
長岡出雲崎	渡辺 晃子	魚沼	鎌田 忍	佐渡	小川 義登
長岡出雲崎	犬飼 直之	魚沼	佐藤 宏	佐渡	川上 高広
長岡出雲崎	長島 裕一	南蒲原	木原 貴徳	佐渡	濱辺 祐
長岡出雲崎	遠藤 晃	新発田	渡邉 智美	佐渡	末武 英夫
長岡出雲崎	牧野 昌和	新発田	江口 千佳	佐渡	中嶋 恭平
長岡出雲崎	大矢 宏美	新発田	菊池 聖美	佐渡	細木 輝雄
長岡出雲崎	稲田 孝志	新発田	鹿間 聖	佐渡	中平 琢磨
長岡出雲崎	近藤陽一郎	新発田	鈴木 和恵	佐渡	渡辺 利一
長岡出雲崎	黒嵜 純平	五泉	小池 誠	胎内	小野 智裕
加茂	吉村 陽介	五泉	中野 一昭	聖籠	佐藤 史淑
加茂	田浦 祐二	五泉	大川 正史	聖籠	岡田 崇宏
加茂	白井 明	燕・弥彦	竹野 和仁	阿賀	伊藤 昭夫

（以上　75名）

小千谷市には日本最初の公立小学校があります

小千谷小学校

日本最初の公立小学校としての誇りを胸に

明治元年10月1日、「日本で最初の公立小学校」として開校し、今年度開校157年を迎えました。

27年前、開校130年の記念事業の一環として、東京大学の佐藤学教授（当時）に脚本を書いていただいた劇「学校の創生」を児童・教職員・保護者・地域が演じ手、スタッフ、合唱隊の一員となり一丸となって上演しました。

～劇「学校の創生」を通して学ぶ当時の人々の想い～

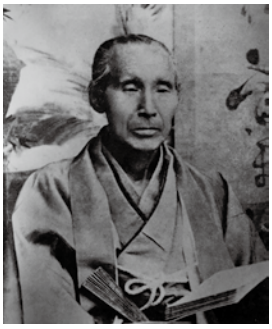
劇の主人公は、小千谷の縮(ちぢみ)商人の家に生まれ、若くして漢学・国学を学んだ山本(やまもと)比呂伎(ひろき)です。山本は、戊辰戦争が終わった明治元年10月1日に、千両もの私財を投じて、「日本で最初の公立小学校」として小千谷小学校の前身である「小千谷校 振徳館」を開校しました。当時、戦いに苦しみ疲弊し、これからの時代に不安を感じていた中で、新しい日本に役立つ人間を育てるには、誰もが入れる公(おおやけ)の学校をつくって教育することだと声を上げた人が山本でした。明治5年（1872年）に、全国に学校をつくろうというきまり「学制」が出る5年前のことでした。

～「敬(つつし)みて、寛(かん)に在(あ)れ」～山本比呂伎の「創学の心」を受けて～

山本は、「学問を急がず徐々に浸透させ、子どもが本来もっている『天性の真』を自然に体現させていくことが大切である」と、徳育重視の教育を進めました。この山本の教育を表す言葉が「敬みて、寛に在れ」です。

現在は、6年生が毎年11月上旬に演じ手やナレーションを担当しながら脈々と上演し続けています。学校の創設に関わるエピソードを劇にして全校児童はもちろん、保護者・地域のみなさんにも観ていただき、多くの感動を与えています。

山本の「創学の心」を学んだ子どもたちは、小千谷という地や、先人の偉大さを誇りに思い、今の自分にできることは何かを考えています。



小千谷の縮商人
山本比呂伎

新潟県小中学校PTA連合会及び新潟市小中学校PTA連合会推薦の『小・中学生総合補償制度』にご協力いただきますようよろしくお願い申し上げます。

『小・中学生総合補償制度』の概要

❶ **児童・生徒のケガ(傷害)を学校内外問わず24時間補償します。**

❷ **保護者の負担した損害賠償責任(他人への弁償)を補償します。**
(保険金の請求手続きは保護者本人が行います。)

❸ **被害事故補償、育英費用補償、携行品損害補償、医療補償の付いた充実プランも選択できます。**

❹ **フリーダイヤルで急病やケガの応急処置などの相談ができます。**

❺ **個別加入に比べ、団体契約であるためとてもお得になっています。**

皆様におかれましては『小・中学生総合補償制度』に格段のご理解とご協力をいただき感謝申し上げます。
令和５年度は２,５９５名の新規加入を受け付けましたので、全体の加入者は１４,４１２名となりました。重ねて感謝申し上げます。
また、昨年１年間で１,３６６件の事故の保険金をお支払いいたしました。多くの方々のお役に立たせていただくことができました。

お問い合わせ

一般社団法人　新潟県PTA安全互助会
TEL：025(280)0361

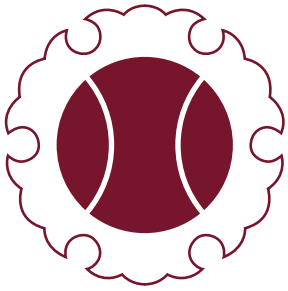
取扱い代理店

有限会社　新潟コーリン

制度引受保険会社

東京海上日動火災保険株式会社
三井住友海上火災保険株式会社
ＡＩＧ損害保険株式会社
共栄火災海上保険株式会社
損害保険ジャパン株式会社

小千谷市の紹介



小千谷市　市章

へぎそば

新潟県魚沼地方発祥の郷土料理で、つなぎに布海苔（ふのり）という海藻を使ったそばを、へぎ（片木）と呼ばれる器に盛り付けたものです。
1866年に布海苔入りの蕎麦を食べたという手記が残っています。
へぎそばは、つなぎに布海苔を使用することで、ツルツルとしたのどごしと弾力のある歯ごたえが得られ、一口サイズに束ねて盛り付けられるため、独特の美しさがあるのが特徴です♪

小千谷縮（ちぢみ）

越後の麻布は、江戸時代に将軍への献上品とされた逸品。この頃、緯糸(よこいと)に強い撚(よ)りをかけ「シボ」というシワを出す、独特のシャリ感が特徴の「小千谷縮」が誕生。手作業の優れた工芸技術は、国の重要無形文化財に指定され、ユネスコ無形文化遺産にも登録されています。

錦　鯉

約200年前、食用の鯉が突然変異で色付いたものが始まりと言われます。その後、研究と改良を重ね、国内外で高い評価を得るまでに。平成29年には新潟県の観賞魚に指定。「雪の恵みを活かした稲作・養鯉システム」は日本農業遺産にも認定。日本の美を象徴する「国魚」として世界的に評価が高まっています。

牛の角突（つのつき）

勝負を仕切る勢子（せこ）たちの「ヨシター」の声に勢いづいた牛が、1トンを超える巨体をぶつけあう姿は迫力満点。江戸時代後期には滝沢馬琴『南総里見八犬伝』に記載されたことのある伝統行事で、地元では1,000年の歴史があると言われています。国指定重要無形民俗文化財にも指定されています。

片貝花火

片貝の人々が成人や還暦を祝い、浅原神社へ奉納して打ち上げる片貝花火は「山の片貝」と称され、越後三大花火のひとつとして知られます。小千谷の秋の夜空に咲く大輪の花「四尺玉」は世界最大級で風圧を感じるほど圧巻！県内外から訪れる観衆を魅了します。

お問い合わせ

新潟県小中学校PTA研究大会 小千谷大会事務局
小千谷市立小千谷中学校　大橋 直子
TEL 0258-82-2297　FAX 0258-82-1776　メール yachu-syukan@ojiya.ed.jp